

## 主な佐伯姓の家と

### 元佐伯家中の諸家

佐伯 朗

(会員・東京都練馬区石上井台)

惟定と共に豊後からやってきた津藩の人々について次のようにまとめてみた。残念ながら彼方此方駆け回った資料が殆ど発見出来ず、取り敢えず分かっていることだけ収束した。もっと資料集めに回りたいが、なにしる東京から津市は遠く、佐伯市に至っては尚更でなかなか思うようにはいかなかった。

\*初代、□代などは便宜上藤堂家に来てから数えている。また、家の名前は一応初代の名としたが、同じ名を代々継承している場合は、そちらを使用している。

佐伯久左衛門家

初代は惟真、惟定の重臣で、梓峠の島津追撃戦で先陣を務めた佐伯次郎左(右)衛門惟澄(惟定の伯父)大坂の役には二代目の久左衛門惟友(慶安元年死去)が出陣しているから、惟澄は藤堂家に仕えてまもなく死去したのであろう。召し出されて直臣となった直後は百石、文政年間は百三十石、天保年間は二百三十石を領す。明治期の当主は佐伯惟毅(藤堂彦兵衛家より養子)という方である。

佐伯正左衛門家

佐伯の姓を持つが、豊後佐伯筋ではない。藤堂高次の側妻・「佐伯氏」が河辺了也に再嫁して産まれた娘が芦川清大夫の継室となり子を産んだが、芦川家の家督は先妻の子が継いだので、高次の命で百石を賜り、養父方の佐伯姓を名乗った。子孫の方は津市に在住しておられる。

佐伯内蔵助家

佐伯権之助家分流。佐伯惟信の次男・内蔵之助惟晴

(御用人)を始祖とする。最初の禄は九百石。嫡子・惟典が早世した為、藤堂式部家から善之助信文が養子に来て、貴和馬惟親と称す。三代はまた緒方勝弥が養子となり貴和馬惟寿と称す。禄は五百石。四代は婿養子で惟彦(昌)「安濃津俳人佐伯蘭圃」が入り、五代は環惟脩(鉄砲頭、後に護国中隊令士)。

#### 佐伯小右衛門家

日向高城合戦で戦死した佐伯掃部介鑑述の息子・佐伯小右衛門統虎が初代。慶長の役には惟定の名代として出陣し、深傷を負い、まもなく死去。二代は佐伯六左衛門惟利(承応元年死去)。直臣となった当時の禄は百三十石、三代の相統時は二百三十石。文政年間には「佐伯彦之進・百九十石」とあり、天保年間には「佐伯彦大夫・楠流・百三十石」、明治十五年には「佐伯町居・佐伯彦太郎」とある。

#### 佐伯重右衛門家

佐伯権之助、佐伯家士の分流ではない。名張の藤堂宮内家中で、豊後もしくは伊予に分派した佐伯氏もし

くは緒方氏の裔かと思われる。同氏の由緒書に拠ると、「豊後国主小縣三郎藤原惟孫藤原惟房豊後守豫州今治鞍附之庄居住一巨宮殿造立社頭礼祭経営専要二男同居惟政伊織之庄……」

とあって、以下の変移を述べれば、寛永二年に初代・小県惟政が今治城主として伊予に居残っていた藤堂高吉に四十俵で仕官し、佐伯伝助惟政と改名。高吉に従い、寛永十二年名張に移る。同家は藤堂藩時代名張で唯一の佐伯氏で、家紋は左二巴である。子孫の方は名張市に在住しておられる。

#### 高畑七郎右衛門家

元佐伯十二家士の一家。惟定の臣下で、天正年間に佐伯家家老だった高畑伊予守の弟・高畑勘左衛門が初代。日向三河内の戦闘に参加し、後、惟定に従い藤堂家に来て大坂両陣にも出陣。二代は七郎右衛門惟親。三代・七郎右衛門惟道。召し出された江戸初期の禄は二百石であったが、明和六年十二月の一揆への防備の中には「御菩提所・三百五十石・高畑七郎右衛門」、また、天保年間には「大小姓・二百八十石」、安政年

間は「二百石・高畑甚左衛門」とある。子孫の方は津市に在住しておられる。

#### 高畑多兵衛家

高畑太兵衛とも。初代は慶安三年十二月二日死去。

二代は高畑伝右衛門、後、多兵衛。直臣となった当時の禄は百五十石であったが、文政年間には城番の職にあり、十八俵二人扶持にまで下がっていた。

#### 高畑理兵衛家

初代は惟定の臣下で、番匠淵の薩使襲撃に杉谷帯刀と共に加わり、新納三郎を討ち取っている。三河内城攻略、梓峠の島津追撃戦にも参加し、文禄の役にも出陣。大友義統が惟定に武功をあげた者を推薦せよと言った時に、惟定はこの理兵衛と勘左衛門（七郎右衛門家の初代）を推挙し、二人は義統に謁してその軍功を賞されたという（佐伯郷土史）。慶長の役にも参加。この時、理兵衛の船には三十七人の兵が乗っていたが、その日の戦いが終わってみると二十七人が重傷を負い自らも負傷し骨折していた。高虎はこの奮戦ぶりを聞き、理兵衛に薬師を遣わしたという。二代目は寛文五年に死去している。子孫は幕末まで続いた。

召し出された当時の禄は二百五十石、文政年間は「七代目高畑蒨・三百石」、天保年間も禄は変わらず組附、安政四年には「高畑堅四郎・三百石」、明治十五年には「高畑柳二郎」とある。

#### 杉谷忠右衛門家

文禄の役の杉谷忠右衛門惟之が初代か。後裔と思われる十左衛門は寛文十三年、追放処分となる。

#### 杉谷猪兵衛家

豊後時代、佐伯氏の配下であったが、佐伯氏没落の後には浪人していた様だ。初代惟宗は元和元年、惟定の仲介で藤堂家に来て、藤堂三郎兵衛の家士となり大坂夏の陣に参加。翌年藤堂三郎兵衛家は跡継ぎ無しにより絶家。猪兵衛は直臣として召し出される。同家の由緒抜粹に拠れば、

「本国豊後、元祖は佐伯権之助元祖大夫惟基次男にて代々大友幕下に属し元祖より二十二代惟宗豊後没落の後勢州に移り宗家権之助肝煎を以て慶長十八年御当

へ来……」

とあり、また別の記述には、

「家士杉谷猪兵衛は萱撤にて武功人の知る所なれば召し出され二百石を賜る」

ともある。文政年間には同家は久居藩（津藩の分藩）

士となっており、「寄合・二百石」とある。

### 長田三郎兵衛家

惟教→惟定の重臣・長田下総入道天楽の流れか？初代の長田三郎兵衛惟氏は慶長の役で大いに活躍し、また関ヶ原戦の時板島城下で起きた騒動を一人で乗り込んで行つて鎮圧したり、大坂の陣でも首級を挙げると豪の者であつたらしい。二代は万治元年に死去している。召し出されて直臣となつた後、その子孫は伊勢加判奉行に取り立てられる。初代・惟氏の代は百石だったが、天保年間には「寄合・八百石」とあつて、幕末までに佐伯権之助を上回る程禄を重ねていた。天保年間の分限帳には「百石・長田重吉」なる人物がいるが、同家との関係は不明。

### 泥谷仁左衛門家

同家初代は大坂両陣に出陣。二代目は泥谷仁左衛門宗清で明暦二年に死去している。三代目まで続いたのは確かなのだが何時の間にか消えてしまい、幕末の分限帳には見当らない。

### 泥谷所右衛門家

初代は泥谷吉兵衛か。二代目は明暦二年に死去。三代目は寛文七年に死去している。仁左衛門と同じく何時の間にか消えてしまい、幕末の分限帳には見当らない。

### 衛藤伝左衛門家

惟教の家臣・衛藤刑部丞景友→衛藤主水の流れらしい。弟・衛藤惣右衛門と共に惟定に従い藤堂家に来て後、大坂両陣に従う。召し出された当時は百石、文久年間には二百石、天保年間には百五十石、安政年間には二百石を領す。

寺島正兵衛・那須理右衛門は江戸中期まで続いたが、

大坂夏の陣の時の様子の他は全く不明。また、享保年間の伊賀附分限帳にある「佐伯逸平」や幕末久居藩分限帳の「新心流居合術師範・佐伯彦四郎」、「高山公遺話」の著者「佐伯惟直」、藤堂高次の御薬師「佐伯周千」等もいるが、いかなる人々か分からない。

### 佐伯与力

正保二年二月二代目佐伯権之助惟正（重）旧年病死す。嗣子大三郎（惟信）時に七歳也。幼稚たりと云へども家柄筋目の者たるに依て遺領四千五百石の内千石の食禄を賜ひ是まで権之助召仕し家臣拾余人はまで佐伯家にて食したる本知にて直臣に召しださる。是高麗以来の武功、元和両役の戦功顕然たるに依て也。尚、此拾余人を幼稚大三郎保護の為与力に附属せらる。此度召し出さる者の名。

高畑理兵衛（惟一） 二百五十石  
泥谷仁左衛門（宗清） 百五十石  
高畑太兵衛（惟寿） 百五十石  
佐伯六左衛門（惟利） 百三十石

佐伯久左衛門（惟友） 百石  
高畑七郎右衛門（惟親） 百石  
寺島正兵衛（完方） 百石  
泥谷所右衛門（宗直） 百石  
衛藤伝左衛門 百石  
杉谷十左衛門 百石  
奈須理右衛門 百石  
長田三郎兵衛（惟氏？） 百石

以上十二名が惟定に付き従って藤堂藩に来、惟重死去に当たって召し出された家の者達である。

\*泥谷・寺島・奈須氏らについては、藤堂家の記録どころか豊後時代の資料も見付けられず、極めて断片的になつてしまつた事をお詫び致します。特に泥谷氏は佐伯家中ではかなりの勢力を持っていた筈で、私も懸命に資料を探し回りましたが、その出自、経歴等一切が不明です。どなたか御存じの方がおられましたら、御教示頂ければ幸甚に存じます。

『佐伯史談』第一五八号訂正

- 1 三ページ下段一八行 「惟慶」を「維慶」に
  - 2 四ページ上段一行 「佐伯家庶子」を「佐伯姓諸氏」に
  - 3 同五行 「長州征伐にもくしている」を「長州征伐兵制名簿にも佐伯姓の侍士の名がある。」に
  - 4 五ページ下段八行 「杉谷十左兵衛」を「杉谷十左衛門」に
  - 5 同五ページ上段六行 「佐伯権之助惟定はく乗っ取る」を「船威考」は、この日の巨済島沖の戦闘に惟定が出陣した様になっているが、これは誤りの様である。
- 佐伯権佐家の記録には、  
慶長二年高麗御陣の節、板島の御城御預け被成候に付、高山様御意にて家来高畑理兵衛佐伯小右衛門右兩人権佐為名代鉄砲八十挺差添罷立せ申候。於高麗、家来儀番船等切捕能働申候付、高山様御感の上権佐被為召御船等被仰付御跡より高麗へ罷立申候。とあり、また家士・長田三郎兵衛、高畑理兵衛の記録

も同様の記述をしている。よって朝鮮出兵に従ったのは確かだが、この海戦には参加していない。また、三郎兵衛の乗った船に付いて同家の記録は次の様に著している。

慶長二年高麗御陣相勤め申し候。其節高畑理兵衛、佐伯小右衛門、高祖父三郎兵衛、杉谷忠右衛門一所に船二艘にて罷り越し候。……大將船捕り申し候に付、働きの御吟味御座候節、高畑理兵衛、佐伯小右衛門、三郎兵衛、杉谷忠右衛門乗り出し候船、二艘共御目に懸け申し候。其時公儀御目付衆御覽成され候処、楯部小半弓矢数百五十節と二百余と射ち立ち有之候。三郎兵衛も足を射させ申し候、其外手負数多く御座候。其以後御手柄の御詮議御座候、加藤左馬助（嘉明）殿、御自身番船を切り取り船数も多取り申し上は其日の御手柄と仰せなされ候。高山（高虎）様には大將船御取成され候上、第一の御手柄と仰せ成さり御論有之、御目付衆御吟味成され候処、松浦法印（鎮信）仰せ候は大將打取、大將船御取成され候上は此度の第一番の御手柄と仰せ成さり候故、高山様其日の第一番の御手柄に成申候は三郎兵衛乗っ取り申し候大將船に御座候。

なお、藤堂勘解由家の系図その他は林泉氏の著書に拠らせて頂いている。世代数は同氏宅をお訪ねした時に所蔵の系図等をメモさせて頂き著述した。

### 主な参考資料

- 『藤堂藩功臣年表』、『元和先鋒録』 中村勝利校註三重県郷土資料刊行会  
『宗国史』、『永保記事略』、『序書類編』 上野市古文獻刊行会編  
『安政四年津藩分限帳』 堀井光次編 光書房刊  
『津市史』 梅原三千著 津市役所  
『藤堂姓諸家等家譜集』 林泉著  
『大分県郷土史料集成』 垣本言雄編  
『津藩名簿』、『佐伯正左衛門家由緒書』、『名張佐伯家由緒書』、『藤堂高次御代分限帳』、『藤堂高次御代絶家之大概』、『佐伯史談一五五・一五七号』 佐伯権之助風間、補記』その他等

### 表紙解説

#### 天正使節伊東マンシヨの像

大分県庁前昭和通り交差点の近くに建てられている。大分市の中心地に位置しながら、この像の前に佇む人は希である。時代と共に変わり行く人の心とは云え、なにか心の片隅に寂しさを感じる。

478年前キリシタン大名大友義鎮（宗麟）・大村純忠・有馬晴信等がローマ教皇のもとに派遣した、少年使節正使伊東マンシヨ・千々石ミゲル・原マルチ・中浦ジュリアンの四名であった。天正十年長崎を出港マカオ・インド経由でリスボンを経て陸路でマドリードに行き、スペイン国王フェリッペに謁見、85年ローマに到着、教皇グレゴリウス13世とその後継者シクスツスノ5世に謁見した。その後各地を歴訪した後、天正一八年（一五九〇）帰国した。